

氏名	なが た よう いち 長 田 陽 一
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学位記番号	教 博 第 49 号
学位授与の日付	平成 17 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目	心理療法における〈他者〉の問題について

論文調査委員 (主査) 教授 伊藤良子 教授 河合俊雄 助教授 角野善宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、心理療法における〈他者〉の経験についての研究である。本論文の〈他者〉は、経験の了解不能な次元をも含んでいる。知識や一般的な経験に還元され得ない「未知なるもの」としての〈他者〉は、心理療法の場では、症状・夢・無意識・記憶等として、またクライアントとセラピストの関係性の問題として現れてくる。それゆえ〈他者〉の経験はクライアントのみならずセラピストの主体性を脅かすが、同時に変化の可能性を開く。心理療法の固有性と発展可能性は、そこに求められるとの考えが本論文の基軸である。

とくに、本論文では、Derrida, J. におけるエクリチュールの反復可能性と非現前性(事後性)についての洞察に着目し、Freud, S. のテキスト等を取り上げて、そこに刻まれた多様な断絶やそれらが修復された傷痕、矛盾やズレ、作者の意図に反して洩らされてしまうこと等を、テキスト自らが開くがまま読み取ることが試みられた。

まず、本論文の導入である第1章では、〈他者〉の問いを、〈他者〉からの問いへの「責任=応答可能性」として考察されている。〈他者〉への「責任=応答可能性」は「他者の身代わりになって死ぬ」ことであるという Levinas, E. の観点と Derrida が提唱する「脱構築」が用いられて検討された。

第2章では、心理療法における〈他者〉理解を、Husserl, H. (現象学)、Stolorow, R. (自己心理学)、Ogden, T. (対象関係論)、木村敏(精神病理学的現象学)について概観し、さらに〈他者〉を自らの理論的根幹とする Lacan, J. および Levinas の論を取り上げ、〈他者〉の位相に注目して検討された。

第3章では、Hegel, G. W. F. の『精神現象学』に対する、Lacan と Bataille, G. それぞれの取り組みを通して否定性としての〈他者〉の次元が検討され、弁証法的円環作用を越える可能性を考察し、臨床場面に臨むセラピストの姿勢に関する新たな視座が模索された。

第4章では、名前と固有性との近接関係を取り上げ、Kripke, S. の固有名論、Lacan の『盗まれた手紙のセミネール』、Freud の『不気味なもの』について検討された。

第5章では、Gebattel, V. E. (現存在分析)の事例報告を取り上げ、心理療法における現象学的アプローチの意義と問題点に関して、自らの内部で働いている「現前の欲望」の無自覚について、無限なものとしての〈他者〉を封じ込める危険性から考察された。

第6章では、Freud の『夢判断』を読み解きながら、根源的な〈他者〉の場所としての夢について論じられた。

第7章では、Descartes, R. の『省察』に沿ってコギトの道程を辿りなおし、Foucault, M. と Derrida の論争や Lacan の論を参照しつつ、クライアントとセラピストの関係、コギトと〈神〉との関係について検討された。

第8章では、精神分析と〈Freud〉の固有名の関係について、『快感原則の彼岸』の「いない—いた遊び」のモチーフから、他者への“終わりなき”喪のプロセスとしての考察が試みられた。

最後に、第9章において、これまでの論述が、心理療法にとって中心的テーマである「記憶」の問題によって整理された。

記憶は、〈他者〉へとつなぐための通路であることを示唆し、記憶の連続性（反復）と非連続性（断絶）との対立に先立って問いかけるようなある根源的な場についての考察をもって結語とされた。

論文審査の結果の要旨

本論文で提示された「心理療法における他者」とは、セラピスト―クライアント関係に必然的に伴われる深淵のことであり、無意識や死の欲動、症状、夢、記憶、さらには文学、歴史、哲学等臨床心理にとって周辺的に見える他の思想も含まれる。他者を了解可能なものに変えてしまうのではなく、最大限に〈他者〉を理解しようとしながら、理解不可能なある資質へどのような責任＝応答可能性を果たすことができるかという問いが本研究の中心主題である。心理臨床における本質的な問いが問われた論文であると評価された。

本論文では、まず、主体と他者との出会いの諸相を、現象学の「間主観性」、対象関係論の「投射同一化」、木村敏の「絶対的他」、J・ラカンの「他者の欲望の欲望」、E・レビナスの「他者の死に対する配慮」等の概念における他者の他者性に注目して取り上げ、心理療法は、各面接ごとに規則を再創出するという不可能な試みにおいて、規則が未知なるものとしての他者への通路となると考察された。このような他者論の捉え方は非常に重要であると評価された。

次いで、クライアントに〈未知なるもの〉として体験されている症状や悩みについて、心理臨床面接では、それは単なる逸脱として除去されるのではなく、それぞれの生のなかに位置付けられ、代替不能な各人の固有性として捉えなおされていくが、この点に関して、本論文では、この固有性とは〈未知なるもの〉を弁証法的に自己のもとへ取り込むことで獲得されるのではなく、私たちがすでに手にした固有性や同一性から身を引き離し、自らの位置を絶え間なくずらしながら、〈未知なるもの〉に浸食されつつ、問いの間際まで赴くことであるとの論が展開された。本論の主旨は高く評価されたが、臨床におけるその実践の難しさが指摘された。

また、夢について、夢の中で迫真性を感じつつその由来を問う夢が検討され、それは夢を見ながらその夢について損なうことなく語るということであり、そこに夢見ることと覚醒との間のねじれが不可避免的に呼び込む〈他者〉が圧倒的な現実性を帯びて迫ってくる状況を見てとって、夢は未知へと連なる裂け目をふさぐことによって、遡及的に成立するとの観点が提示されたが、この点に関しては、統合失調症における妄想や幻覚の生成や消退についての機序への接近をも可能にする意義深い視点であるとの評価がなされ、今後さらに臨床的に吟味されることが期待された。

さらに、喪の作業について、死者のなかの他者性と関わり続けるためには喪の作業は完了することがないとの本論の二律背反の視点が、臨床実践においてとりわけ重要であると評価された。

以上の点から、本論文は、〈他者〉の観点を主軸にした心理療法論として位置付けると評価された。原著者自身の心理療法例は取り上げられてはいないにもかかわらず、この論の根底に、自らの内なる〈他者〉に振り回されて苦しんでいるクライアントの問いのあることが読み取れ、その問いを真摯に問い続けた道程が本論文であったと認められた。ただし、J・デリダの脱構築論に多くを負ったために、J・ラカンの転移論の研究が不十分になったこと、W・ギーゲリッヒの分離と融合の観点も参考にした検討が期待されること等が指摘された。しかしながら、それらは博士論文としての価値をそこなうものではないと考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年6月2日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。